わたしの平和とあなたの平和と

松本桜季

■はじめに

日本国のリーダーへ送る。

たくさんの「わたしの平和」が重なり、織りなす大きな平和で溢れるような世界で生きていきたい。その世界は、比喩表現が許されるならば、日本の例えば和菓子や十二単の文化に潜在するような他者と自分をわけながらも互いに感じとり、つながり、重ね合わせることのできる空間ではないだろうか。

しかし、現代の日本においてそうしたつながりを感じられる空間は奪われつつある。他者どうしが重なりあわない空間において、人は利益のためなら人をモノとして扱うこともいとわない。人は互いの違いを、同調や圧力によって塗りつぶすか、敵対するかでしかみようとしない。利益のためなら人間をモノとして扱い、銃を突きつける。

そんな価値観が多様化し混沌とした現代にこそ必要なのは、対話空間である。対話空間を増やすことは、歴史からの自身の存在価値と、失われつつある戦争の記憶と共に生きることへの第一歩を踏み出しやすくすることができると考える。

■わたしが見つけた、わたしの平和

大学一年時にロシア・ウクライナ戦争が始まり、日々痛ましいニュースを見ることしかできずにいたわたしにとって、過去に世界中で起こり、そして現在進行形でもある戦争について一人で考えることは苦しく、考えるほどに無力さを感じさせた。戦後80年を目前に控え、若者が戦争の悲惨さと記憶を伝承していくことの大切さを感じた大学内の仲間と共に、ヒロシマとナガサキへのフィールド調査を行った。二つの都市への訪問を通して、私たちが今までの世代とこれからの世代をつなぐ、生きた継承者であると感じたのだ。

被爆体験者の話をきき、広島大学や長崎大学の学生と対話し、広島現代美術館への訪問などを通してわたしが感じたことは、一人ひとりがもつ「平和」は、これまで大きな枠組みがもつとされてきた、力としての平和とは大いに異なるということである。

被爆体験講話の中で、当事者の方は遠方から来た私たちに「広島にようこそおいでくださいました」と挨拶をし、最後に「皆様のこれからの日々が、輝かしいものでありますように」という言葉を残した。わたしは「彼女の存在そのものが、平和を体現している」と感じ取った。親近感の湧く語りの中に、時折苦しそうな表情を見せる彼女から、とても強い何かを私たちに託すような、バトンを受け取った気がした。「戦争なんかで死んじゃだめだからね」。今回

の講話で一番深く心に残った言葉である。彼女は会ったことのない人にまでも思いを馳せ、自分が思う平和を世界のために伝えてくれる人であった。

広島大学と長崎大学で行った学生との対話では、個人が考えるヒロシマ、ナガサキ、日本のあり方や平和についての捉え方こそ違えど、それらを捻じ曲げたり否定したりすることはなかった。おのおのが「原子爆弾の投下」という痛ましい歴史の上に生かされている以上、「自分が間接的な当事者である」という使命感を共有し、自身の存在を存分に尊重しあうことのできた空間であった。一方で言語使用に比重がかかる対話空間は、声を持たないひとや耳が聞こえないひとにとっては、その存在自体が暴力にもなりうるのではないかという新たな問いをいだいた。こうした社会的マイノリティとともに平和について考える上で、同じ人間どうしいかにつながりあえるか。今後の課題であると感じた。

この活動を通してわたしは、自分の「わたしの平和」を、誰かから教わって自分の中に備わるものではなく、もっと身近にあるものに対して心から少しずつ湧き出てくる水のような、そんな感情のことだと考察した。

そして広島現代美術館では、さまざまな分野に精通したアーティストが多様な角度から考える「わたしのヒロシマと平和」を表した作品を展示していた。作品との対話を通して感じたことは、定義せず、作品としてしか表すことのできない「わたしの祈り」であるからこそ国籍や性別、肌の色や障がいなど、全ての違いを受け入れられる空間が生まれるのだということだ。これらの経験を経て、わたしはさまざまな形の「わたしの平和」を受け取った。それは自身の思いを言葉にして渡してくれたり、作品にして訴えかけてくれたり、平和記念公園のように悠久の平和と祈りを空間として伝えてくれたりした。言語と非言語を介した対話に触れる中で、わたしはその全ての「あなたの平和」を尊重し、受け止めた。

■わたしの平和とあなたの平和と

互いの存在やナラティブを最大限に尊重しあった上で成り立つ空間で対話を始めることからしか、わたしの平和が重なりあった大きな平和を守り続けることはできないし、「平和」は見えないからこそ、見えるものよりも強く抱きしめる必要があるのだと考える。そうした対話空間を作れるのはきっと他の誰でもなく、現代人であり日本人である私たちだけであり、いつの時代でもなく、きっと今だからこそできることなのだ。